

# インドネシア・ラマレラ捕鯨文化の四半世紀

江上 幹幸\*・小島 曠太郎\*\*

## はじめに

ラマレラは、インドネシア・バリ島から連なる小スンダ列島の東部に位置する小島、レンバタ島にある一村である。レンバタ島は農業を主に零細漁業を加えた経済で成り立っている。その中で、島の南海岸に位置するラマレラ村は伝統木造船プレダン (peledang) による手投げ鉞漁でマッコウクジラを対象とした捕鯨のほかにもイトマキエイなどを捕獲し、それを山民の農作物と物々交換するというインドネシアの他地域では見られない独自の文化を400年以上前から現在に至るまで継続させている(写真1)。江上と小島は毎年当該地に赴いてラマレラ文化の研究を25年近く継続してきたうえで、マッコウクジラ捕鯨を核としてクジラ肉などの物々交換による地域社会との共生関係を含めたものを《ラマレラ捕鯨文化》と定義した(江上・小島2012, Egami Tomoko and Koutaro Kojima 2013, 図1)。

そうした研究のなかで、21世紀に入りインドネシア政治・経済・社会の発展が地方の近代化を促し、当該地域の文化に大きな影響を与えてきたことを解明してきた。ことに2009年以降は、社会の急速な変化に伴って新たな漁法が導入されることで、漁業形態や村社会にも変化が見られ、伝統捕鯨文化の一部が失われてしまう可能性が見え始めてきた。さらに、2013年から2017年の数年間には歴史的事件や革新的出来事が相ついだ。それと同時に世代交代がほぼ完了し、新世代における価値観や生活意識の変化、さらには経済活性化優先の国内社会情勢といった影響も相まって、今後のラマレラ社会が劇的な変容を遂げることも考えられる。

私たちは世界で唯一おこなわれているラマレラのマッコウクジラ捕鯨を、人間と鯨との関わりを知る上で極めて貴重な「人類共通の生きている無形文化遺産」と捉えている。その歴史を記録しておくことはきわめて重要だ

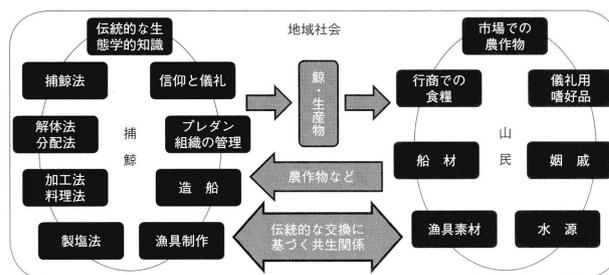


図1 ラマレラ捕鯨文化概念図

と考え、継続研究することを使命として課している。本稿ではまず村と捕鯨文化の概要を紹介し、次に調査を開始した1994年から2017年までのおよそ四半世紀にわたる捕鯨記録を参照してラマレラ捕鯨の特徴を見る。最後に、ラマレラ社会の転換点となった1999年以降の漁の変遷と村の変化の歴史を通して、現在の問題点を考える。現在に至るまでのラマレラの変化をたどることで今後のテーマを探り、引き続き研究を継続したい。

## 1. ラマレラ村概略

インドネシア共和国は1万3500の島に2億4000万人が暮らす島嶼国家である。行政上34の州があり、ラマレラ村のあるレンバタ島は東ヌサトゥンガラ州に属する。東ヌサトゥンガラ州(略称NTT)は面積47,349.90km<sup>2</sup>、人口4,899,260人、1市21県から構成されている。レンバタ島は1999年にひとつの島だけでレンバタ県として東フローレス県から分立した。島は南緯8度の熱帯に属し、島民のおもな生業は農業で焼畑耕作によりトウモロコシ・陸稲栽培をおこなう。捕鯨はラマレラ村と隣のソロール島ラマケラ村だけの独自の文化である。

レンバタ県は面積1,266.39 km<sup>2</sup>で沖縄本島(1,201km<sup>2</sup>)とほぼ同じ面積で州の面積の2.6%、人口123,141人で州の人口2.5%を占めるに過ぎない行政区である。レ

\* 元沖縄国際大学教授

\*\* 文筆家・ラマレラ捕鯨文化研究者

ンバタ県は県都をレウォレバに置き、9郡151村の行政区画から構成され（BPS 2014a）、ラマレラは島の南岸ウランドニ郡に属している。

ウランドニ郡は面積121.44km<sup>2</sup>、人口8,485人、15村からなり、厳密に言えばラマレラは1970年の行政区画改編以来二つの村、Lamalera Atas村（上村/通称：ラマレラA）とLamalere Bawah村（下村/通称：ラマレラB）から構成されている。通常、当該地では行政村を区別せずに、ラマレラA村・ラマレラB村を合わせてラマレラあるいはラマレラ村と呼称するのが一般的である（小島・江上1999）。他方、ラマレラ語の伝統地名ではA村はTeti Lefo（上の村）、B村はLali Fata（下の浜）と言い、これは現在も日常的に呼称している。

レンバタ県の2014年国勢調査（BPS 2014b）によると、浜の西側の丘陵に位置するA村は面積5.33km<sup>2</sup>に4集落があり255世帯899人が居住している。村の中心にテティレフォ集落、丘陵地にフン集落とフカレレ集落、そして北側の丘陵を約800m登った標高約210mに位置し、島の先住民族である農耕民の居住するラマヌ集落が含まれている。

いっぽう、浜に面した斜面および浜から東側海沿いの丘陵に広がるB村は面積6.53km<sup>2</sup>に5集落があり243世帯935人が居住している。浜の周囲にレフォベラとフスゴロの2集落、そこから東に約800mにフトウンロロ集落、さらに東に約900mにクロコフォロ集落、オガオナ集落が点在している（図2）。

2014年現在、A村とB村を合わせたラマレラ全体では約12km<sup>2</sup>の土地に498世帯1,834人が暮らしていることになる。世帯別職業では漁民世帯がおよそ7割を占め、農民世帯2割、公務員世帯など1割となっている。参考までに公教育を見ると、小学校児童249人・同教員22人、中学校生徒154人・同教員12人、水産高校生35人・同教員12人となり、教員総数は48人で児童生徒総数438人に達する（BPS 2009）。

ラマレラ捕鯨をおこなう人々はこの地の先住民ではない。伝承によると最初の祖先は16世紀ごろにインドネシア東部諸島からこの地に移住してきた、もともとサメ・ウミガメ・イトマキエイなどの銚漁をしていた海民である。その後、西部諸島からのグループと島内山間部からのグループが段階的にこの地に移住し、現在三つのグループ18氏族が存在する。また、前述した焼畑農耕民である先住民が現在も居住している。宗教は住民のすべてがカトリックの信徒である（写真2）。イエズス会宣教師が1886年にレンバタ島で初めての洗礼をラマレラの地でさづけ、それ以来の伝統で教育水準はとても高い。

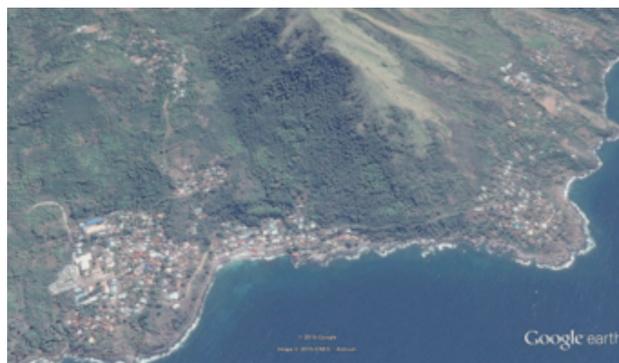


図2 ラマレラ

男女の分業が確立しており、男は海に・女は山にという暮らしを守っている。男性は木造帆船プレダン銚漁でマッコウクジラのほかイトマキエイ、イルカ類などを捕獲し、小舟による流し網漁でトビウオなどの魚を得ている。また、造船大工、建築大工としても長けている（小島・えがみ2004）。女性は行商「プネタン」（penatang）や定期市（fula）でクジラ肉などを主食であるトウモロコシなどの穀物と物々交換し、塩作り、石灰作りなどのほか機織りをおこない、絣織物は世界的に名高い（小島・江上1999）。

## 2. マッコウクジラ捕鯨と銚漁

世界でも稀な熱帯捕鯨をおこなうラマレラ村の伝統捕鯨は、全長10mのプレダンに10～13人ほどの漁師が乗り、手漕ぎで10m以上ある巨大なマッコウクジラに挑み、銚打ち手 ラマファ（lama fa）が手投げの離頭銚を打ち込んで仕留める突取捕鯨法で、筆者たちは《プレダン捕鯨》と呼称している（写真3）。

年間20頭ほどを捕獲しているマッコウクジラ以外にも大型魚を捕獲するが、生死をかけて捕獲するマッコウクジラはラマレラ語で「コテクラマ」（koteklema）と呼称し、他の獲物とは異なってさまざまなタブーがあり、漁法をはじめ、部位の分配も捕鯨慣習法に則り厳密に定められている（小島・江上1997, 1999）。

何よりも重要な獲物は、その大きさゆえに村中に肉の配分がいきわたるマッコウクジラであるが、プレダンの銚漁ではそれ以外にも多くの種類の獲物を捕獲している。おもな捕獲対象はゴンドウクジラ類・シャチ・アカボウクジラ・イルカ類の鯨類、魚類ではマンタ・イトマキエイのエイ類とジンベエザメ・シュモクザメなどサメ類やマンボウ、カジキ、マグロ、シイラなどの硬骨魚類、そのほかにアカウミガメ・タイマイ・オサガメなどのウミガメ類も捕獲している。銚漁では、海上で目視のできるほとんどすべての生物を捕獲対象としているが、ヒゲ

クジラ類は捕獲対象から除かれている。現在ではプレダンのほかに、船外機搭載の動力船がマッコウクジラを除いてプレダンと同種の獲物を対象に鈎漁をおこなっている。

捕獲されたマッコウクジラの分配法は厳しく定められ、捕獲に関与したすべての者に何らかの分配がある。捨てる部位のないクジラは余すところなく利用され、その巨体は村中にくまなくいきわたっていく。クジラは自家消費用の食料ではなく、物々交換で経済が成り立っているここでは、重要な資本であり、貨幣に代わるものである。またクジラについて貴重な獲物であるイトマキエイ類の分配法なども定められている。

分配されたクジラ肉は女性や子どもなどの家族が海水で洗い、各家庭に運ばれていく。男性が切り分けたクジラ肉は女性が竿にかけて干し、一週間位で日干し肉に加工されて物々交換の貴重な資本になる。自家消費用の赤身は塩をしてから干して保存し、脂身から滴り落ちる油は集められてランプの油に利用する。干した脂身も食用となり交換される。こうして加工したクジラ肉は、女性の手により山の民のもとへ運ばれていく（小島・江上 1999, 江上・小島 2000, 小島・えがみ 2002）。

### 3. 物々交換による共生的関係

女性がおこなう物々交換の方法には行商と定期市の二つがある。定期市は山の民と海の民が出会う場所で、週に一度決まった曜日に開催される市であり、ウランドニ (Wulandoni) とレバラ (Lebala) の市が知られている (写真 4)。行商は歩いて山の村に向かい物々交換をする方法で、「ブネタン」と称する。真夜中の 3 時頃出発して、クジラ肉などと交換した 50 キロほどの重い穀物を頭上運搬して、午後に村に戻るのが一般的で、行商は男たちの捕鯨と同じくらい命を賭けた過酷な仕事である (写真 5, 6)。

定期市場や行商で物々交換される産物のうち重要な農産物は主食のトウモロコシ、そしてバナナである。農産物は 6 本が交換の基準単位で、この単位を「モガ」(monga) と称する。クジラ肉一切れは 2 モガの価値が決められ、トウモロコシやバナナ 12 本と交換される (小島・江上 1999, 写真 7)。

ラマレラの人々はクジラや鯨油という特殊な交易産物を持ちながらも、17 世紀から歴史的に島外との交易をまったく行っていない (Barnes, R.H. 1996)。それは移住民であるラマレラの人々が先住民との共生的関係を構築するための戦術であったと推定される。

クジラを原始貨幣として機能するように島内のみに流

通させ、その価値を維持させることがラマレラの民にとって重要だったと考えられる。そのことにより物々交換経済を継続させ、それに支えられて緊密な共生社会を構築していくということが、主食を生産できない海民が、移住地での生き残りをかけた生計戦略であったと私たちは考えている。クジラ・塩・石灰・土器などの重要産物をすべて押さえて島内に流通させ、やがて 1886 年のカトリック改宗以後は、島の南部地域を管轄する中心的な位置を占めるようにさえなっていた。

クジラの価値は安定しており、社会・経済情勢が変化してもクジラとトウモロコシの交換率に変動がないことが、長い歴史的信頼関係を物語っている。捕鯨の近代化と貨幣経済に移行しつつあるラマレラ村が、主食であるトウモロコシの獲得だけは、現在も山の民との物々交換経済によっている事実は、共生関係継続の重要性を表している (江上 2000a, 2000b)。

### 4. 村内物々交換などの互助システム

クジラなどの獲物の分配は基本的には捕獲に係わった特定メンバーになされ、特に動力船漁では船所有者・船所有者・船外機所有者・(網所有者)・漁夫で配分されるので少人数に渡るのみだが、ラマレラ共同体内では村外での物々交換とは別に村内特有の交換システムが機能している。これは交換率が非常によく、共同体内部の社会的弱者 (ラマレラ語でキデ・クヌケ kide kenuke= 寡婦・孤児) に対する互助システムとなっている。

そのひとつは、クジラ解体中に肉の所有者と直接交換する方法でドウ・スス (du susu パンを売る) と言う。寡婦などが揚げパンを作って持参し、浜に座ってクジラ肉との交換を待つ。揚げパン二枚でクジラ赤身肉一切れを得ることができる。

いまひとつは、クジラ肉獲得者の家を訪問する方法で「パファ・ラマ」(pafā lama 皿を置く) と言う。トウモロコシ粒を満たした皿を手にも所有者家を訪問し、加工し終わったクジラ肉との交換を待つ。一皿で赤身肉二切れと脂身肉一切れを得ることができる。

どちらの物々交換あるいは再分配も生産者のいない女性が親族からの分配以外でクジラ肉を得る数少ない機会として重要である。こうして得たクジラ肉は山民との物々交換用であり、食糧を得る資本となる。これらの交換はクジラ以外の獲物でも、よい交換率で行われている。

ラマレラ共同体にはそのほかにもさまざまな互助システムがある。クジラには特別な分配部位ベファナ (befānā 贈与) が用意されており、捕鯨に関わる何らかの手伝いをした老人などに分配される。また、プレダンや動力船、

表2 58年間の年別マッコウクジラ捕獲統計（1960～2017/9月末）

年	捕獲頭数	総頭数										
1960	26	1970	37	1980	—	1990	12	2000	10	2010	22	1,014
1961	31	1971	43	1981	—	1991	15	2001	35	2011	14	
1962	—	1972	36	1982	8	1992	10	2002	28	2012	3	
1963	—	1973	23	1983	2	1993	8	2003	18	2013	18	
1964	—	1974	23	1984	7	1994	10	2004	14	2014	31	
1965	34	1975	21	1985	11	1995	40	2005	5	2015	7	
1966	15	1976	—	1986	9	1996	18	2006	4	2016	12	
1967	25	1977	21	1987	7	1997	22	2007	43	2017	(9月末) 20	
1968	43	1978	15	1988	7	1998	31	2008	34	2018	—	
1969	56	1979	15	1989	4	1999	6	2009	5	2019	—	
小計	230	小計	234	小計	55	小計	172	小計	196	小計	127	

トビウオ網漁小舟の海への出し入れを手伝った者にはベラク (belaku 報酬) を得ることができ、とくに生産者ではない老人や子供に与えられた数匹のトビウオなどは家庭の食卓を助けている。

こうした相互扶助が機能し、助け合うことで生きていく。なかでも巨大な資源であるマッコウクジラは、共同体全体でその恩恵に与るという考えを前提としており、捕獲したクジラを村に曳いてくるときにだけ歌われる船唄に明確に表現されている。

“sora taran bala, tala lefo rai tai, pau ribu boi ratu”「象牙の角をもつ水牛（クジラ）よ、一緒に村に帰ろう、村のみんなを食べさせよう」

## 5. 漁船と漁法

ラムレラで生業のために使用している船には、伝統帆船のプレダン (Peledang)、動力船 (村ではサパ Spāあるいはジョンソン Johnson と呼称する)、小舟 (Spā) の3種類がある。2015年現在で存在するプレダンは20隻、動力船は30隻を数える。漁期は5月から9月であるが、現在の漁は、捕鯨を含め船種ならびに漁獲対象を異にする操業が行われており、以下簡単に説明を加える。

### 《プレダン捕鯨》

マッコウクジラを対象とした銚漁 (写真8, 9)。漁期は5月から9月であるが、クジラを発見した場合は条件が整えば季節を問わずに出漁する。

プレダン捕鯨は2001年に動力船がプレダンを曳航してクジラを追尾する「動力船参加式プレダン捕鯨」を導入した。2008年以降はプレダンの稼働隻数が減少し、早朝から通常操業する《レファ出漁》から、主にクジラが出現した時に緊急出漁して捕鯨をする《バレオ捕鯨》に移行した。調査開始の1994年以来24年間に捕獲したマッコウクジラの総頭数は450頭で、これを捕鯨回数204回で捕獲している。

### 《プレダン銚漁》

マッコウクジラ以外の鯨類とイトマキエイ類などの魚類を対象とした銚漁。漁期は5月から8月頃まで。プレダン銚漁では2002年に「動力プレダン」を導入したが、2012年にはプレダンの《レファ出漁》は終焉を迎えつつある (写真10)。

### 《動力船銚漁》

マッコウクジラ以外の小型鯨類とイトマキエイ類などの魚類を対象とした銚漁 (写真16)。漁の最盛期は5月から10月頃まで、その後12月から4月までは小型鯨類の出現があれば出漁する。動力船銚漁は1隻に5~6人が乗船し、早朝から午後までの昼間に出漁する《レファ出漁》で、主に小型鯨類・イルカ類 (写真11) とイトマキエイ類 (写真12) を漁獲対象としている。

### 《動力船網漁》

イトマキエイ類を主要漁獲対象にし、その他の魚類・小型鯨類も漁獲する夜間操業の流し網漁 (写真13)。漁期は8月から11月まで。動力船網漁は2009年4月から新たに導入され操業を始めた。これには網目5インチで大型の網が刺網漁の一種である流し網漁として導入され、夜間操業で主にイトマキエイ類を漁獲対象としている。動力船1隻に3~4人が乗り組んで日没前の17時ごろ出漁し、各船が東西いずれかのそれぞれの漁場へ向かう。

漁場では各船それぞれが一カ統の流し刺網を下ろして沖停泊し、深夜から未明にかけて通常は一回の網揚げ操業をおこなう。帰漁は早朝6時頃で水揚げした漁獲は浜で処理して分配される。これは従来小舟でおこなっていた夜間流し網漁の網具の規模を大きくした漁で、漁獲効率がよく、現在では昼間銚漁と並んではラムレラの主要漁法になっている。ラムレラ社会にとって、動力船夜間網漁導入以前とそれ以降の2010年代とは明確に時代を画することができる。2012年からは慣習協議で銚漁優先のため8月解禁と規制された。

表3 24年間のマッコウクジラ捕獲統計

年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数	捕獲回数	総頭数	総回数
1994	10	7	2004	14	8	2014	31	11	450	204
1995	40	18	2005	5	2	2015	7	6		
1996	18	7	2006	4	4	2016	12	5		
1997	22	8	2007	43	14	2017	(9月末) 20	(9月末) 6		
1998	31	13	2008	34	10	2018	—	—		
1999	6	6	2009	5	2	2019	—	—		
2000	10	5	2010	22	8	2020	—	—		
2001	35	22	2011	14	7	2021	—	—		
2002	28	14	2012	3	2	2022	—	—		
2003	18	10	2013	18	9	2023	—	—		
小計	218	110	小計	162	66	小計	70	28		

《小舟網漁》

小舟サンパンの所有者が個人でおこなう漁であり、2008年には62艘があり、多くの若者たちが操業している。小舟による網漁は昼間操業で網目1.5インチのナイロン網を用いて主にトビウオを対象とした漁（小舟トビウオ流し網漁）と、夜間操業で網目5インチの大型網を用いて主にイトマキエイ類を対象とした漁（小舟夜間流し網漁）が行われている。どちらも1人ないし2人で操業する。こうした個人による零細な漁獲記録は集計されていないが、家族の食料と家計にとって重要な漁獲となっている（写真14）。

6. マッコウクジラ捕獲記録

6-1. 58年間のマッコウクジラ捕獲記録

ラマレラ村でのマッコウクジラの捕獲記録が残されているのは1960年以降である。1960年から2017年までの58年間の年別捕獲頭数を示した（表2）。記録のない年が6回ありデータとしては不十分であるが、現在までに1,014頭のマッコウクジラが捕獲されている。記録のない6年を考慮しても半世紀余でわずか1,100頭余りである。これだけの頭数で2,000人近い村人の生活が50年以上にわたって成り立ってきた事実は、イトマキエイ類、イルカ類なども捕獲して生きる糧になっているとはいえ、おおよその計算ではクジラ1頭で村人100人を1年間賄っていたことになり、クジラの持つ重要性は際立っている。

年代別にみると、1960年代は7年間のデータしかないが230頭の捕獲であるから年平均捕獲頭数は32.9頭、1970年代は9年間のデータで234頭の捕獲であるから年平均捕獲頭数は26頭となる。1980年代は、1979年の海底火山の噴火と地震という自然災害の影響からか凶漁が続き、8年間のデータでわずか55頭、年平均捕獲頭数は6.9頭である。

1990年代半ばにはプレダンの改造・新造が相次ぎ、クジラ漁が復活したことから172頭を捕獲して年平均

捕獲頭数は17.2頭になる。2000年代は年ごとの豊漁と凶漁の差が大きいという特徴がみられるが196頭を捕獲し、年平均19.6頭の捕獲というデータを得ている。さらに、2010年代は本年2017年9月末までのデータで127頭を捕獲し、暫定年平均捕獲頭数は18.1頭である。

また、記録に残されている最多捕獲頭数は1969年の56頭、次いで1968年と1971年の43頭であるから、43頭の捕獲頭数を数えた2007年は半世紀余で4回しかない歴史に残る豊漁の年となった。いっぽう5頭以下という極端な凶漁の年も半世紀余で6回であり、豊漁に先立つ2005年と2006年の凶漁は捕鯨史のなかでも深刻であった。その後も2009年、2012年、2015年と極端な凶漁の年がたびたび出現することが21世紀に入ってからラマレラ捕鯨の特徴だといえる。

6-2. 24年間のマッコウクジラ捕獲記録

捕鯨統計調査を開始して以来の24年間の全捕獲記録に基づいて、年別捕獲回数と捕獲頭数を示した（表3）。1994年から24年間におけるマッコウクジラの捕獲頭数は450頭、捕獲回数は204回である。年平均捕獲頭数は18.8頭、年平均捕獲回数は8.5回であるから、捕鯨機会1回あたりの捕獲頭数は2.2頭となる。

この統計からみると、マッコウクジラ捕鯨は年ごとに捕獲頭数の変動が大きく、安定したものではないことが分かる。しかしながら、24年間にわたり統計を取った成果から、ある現象が見えてきた。それは、豊漁と凶漁の明らかな傾向として6年周期のパターンが見られるということである。

その6年周期のパターン内容は、豊漁の年の後3年間はおおむね平均的な漁獲量であり、5年目と6年目には凶漁になるというものである。初めて調査を開始した年から見てみると、1993・1994年は凶漁であったが、1995年に豊漁となりその後3年間を経て5・6年目の1999・2000年には凶漁となった。このパターンを1995年から2000年までの6年間を周期とみなし、第一周期目とする。

表4 23年間の繁殖周期別マッコウクジラ捕獲統計（1995～2017）

繁殖生活史	周期年	第一周期		第二周期		第三周期		第四周期		総頭数	総回数				
		年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数			捕獲回数			
交尾・妊娠期間	1	1995	40	18	2001	35	22	2007	43	14	2013	18	9	136	63
妊娠・出産期間	2	1996	18	7	2002	28	14	2008	34	10	2014	31	11	111	42
授乳期間	3	1997	22	8	2003	18	10	2009	5	2	2015	7	6	52	26
授乳期間	4	1998	31	13	2004	14	8	2010	22	8	2016	12	5	79	34
育児休止期間	5	1999	6	6	2005	5	2	2011	14	7	2017	(9月末)20	(9月末)6	45	21
育児休止期間	6	2000	10	5	2006	4	4	2012	3	2	2018	—	—	17	11
周年小計		小計	127	57	小計	104	60	小計	121	43	小計	88	37	440	197
周期平均		平均	21.2	9.5	平均	17.3	10	平均	20.2	7.2	平均	17.6	7.4	19.1	8.6

その後2001年の豊漁と5・6年目に当たる2005・2006年の凶漁で第二周期目が終わり、その翌年の第三周期目は2007年の豊漁とやはり5・6年目の2011・2012年の凶漁というパターンが繰り返されている。ただし2007年の豊漁2年後に当たる2009年は異例な凶漁となっている。

この6年周期パターンからみて、2007年から7年目の2013年には第四周期の豊漁年になると予測されたが捕鯨失敗が異例の10回を数え、1年後の2014年に31頭の豊漁となった。翌2015年は2009年と同様に凶漁となっていることから、豊漁2年後の凶漁は新たな特徴となる可能性がある。凶漁年である2017年は9月現在ですでに20頭が捕獲されているが、パターンからいえば2018年は凶漁年で第四周期が終わり、2019年は第五周期に入り豊漁年と考えられる。

### 6-3. 6年周期の繁殖サイクル

およそ6年周期のこのような傾向は、マッコウクジラの同じ系群がラマレラ近海に回遊してくると仮定した場合、ほぼ5年に1回の出産というサイクル（加藤1995：193）と関連すると考えられる。

24年間の統計結果から、繁殖サイクルを6年間と想定し、交尾・妊娠・出産までの約2年間、授乳期の2年間、次の交尾期まで休止期の2年間として作成した（表4）。表にしてみると、ラマレラ近海に回遊してくるマッコウクジラ群は、同一パターンで周期的に出現していると言えそうである。

2001年の動力船時代幕開けから6年間漸減し続けていた捕獲頭数は、2007年の豊漁を経てやはり同じパターンで漸減している。マッコウクジラ資源の再生産から考えるとこの傾向は継続していく可能性がある。今後の継続調査により2019年の第五周期1年目、2025年の第六周期1年目の漁獲結果が得られれば、ラマレラ周辺海域のマッコウクジラは同系群が定期的に回遊している可能性に、ある程度の信憑性が得られるデータとなるかもしれない。

## 7. 社会の変化と捕鯨・漁の変遷

ラマレラ村に変化の兆しが見え始めた1999年から2017年まで19年間にわたるおもな事項を年表に示した（表1）。以下、表を参照して社会と村の変化およびインフラの整備を概観し、次に捕鯨と漁法にまつわる出来事をみる。

### 7-1. 社会の変化とインフラ整備

1998年にスハルト体制が崩壊して1999年10月にワヒド新政権に代わり、地方分権化が推進されたことが変化の大きな要因となっている。新政権の政策として中央から地方への分権と地方自治強化（地方行政法と中央・地方財政均衡法の法律制定）が推進され、県・市主体の地方自治政府が多数成立した。

1999年10月15日にレンバタ島が東フローレス県から分離してレンバタ県が発足した。任期2001年までの県知事臨時代行にはラマレラ上村出身のペテル・ボリオナ・ケラフ（Petrus Boliona Keraf）氏が就任した。その後ペテル氏は2009年まで県議会議長に就任している。ワヒド新政権内閣の環境大臣にはペテル氏の実弟ソニー・ケラフ（Sony Keraf）氏が就任して村の大きな話題となった。レンバタ県政府の最重要課題は道路整備であり、地方自治政府によるインフラ整備が急ピッチでなされ、ラマレラ村にも自動車道路ができることになり経済的にも村は活況を呈した。

2000年5月6日に上村と下村を繋ぐ1918年造成の伝統的な階段「グリペ」（gripe）が道路拡張工事で崩壊したことは、村の変化と近代化を象徴している。先人たちが崖を穿って築いた階段はラマレラ村の歴史そのものを刻んでいる。あらゆる伝統文化が爆音とともに崩れ落ちるような思いがするほど、グリペの破壊は衝撃的であった（写真15）。

2001年には動力船6隻が新造されて5隻が稼働し、計10隻が操業することで、プレダン鉛漁から動力船鉛漁への移行と同時に動力船の捕鯨への参加が正式承認されるエポックメイキングな年となった。

2002年5月にはラマレラ捕鯨史初となる動力プレダ

表1 マッコウクジラ捕獲頭数とラマレラ関連年表

年	マッコウクジラ捕獲頭数	ラマレラ村の漁に関する出来事	レンバタ県とラマレラ村の出来事	インドネシア国内の出来事
1999	6頭	11・12月 動力船3隻でゴンドウクジラを21頭捕獲「動力船鮫漁」	10月15日 レンバタ県発足 *ラマレラ上村出身のビテル・ケラフ氏が県知事代行	10月 ワヒド新政権発足 *地方行政法および中央・地方財政均衡法の法律制定 ラマレラ上村出身ソニー・ケラフ氏が環境大臣就任
2000	10頭	1月～3月 動力船3隻でゴンドウクジラを26頭捕獲	地方自治政府によるインフラ整備(ラマレラ上村まで自動車道路工事) 5月6日 上村と下村を繋ぐ伝統的階段グリベが道路拡張工事で崩壊 グリベの崩壊	
2001	35頭	1995年以降の豊漁 4月 動力船10隻に増加「動力船鮫漁」へ移行 4月29日 動力船の捕鯨参加が村の掟として承認され「動力船参加式ブレダン捕鯨」導入	8月4日 県知事にアンドレアス氏就任 ビテル・ケラフ氏敗れる	8月 メガワティ新政権発足
2002	28頭	5月8日 村史上初、ブレダン「ジャフテナ」船外機を搭載して初出漁 「動力ブレダン」導入	8月25日 県都レウォレバト町からラマレラ上村までトラックバス路線開通	10月12日 バリ島爆弾テロ事件
2003	18頭	漁期の不漁が顕著 動力船とベアを組むブレダンがマッコウクジラ捕鯨で優位に	定期船航路の廃止、陸路での輸送に移行 往復定期トラックバス2台に増加 8月20日 ウラウンドニ郡発足	
2004	14頭	5月 動力船21隻に増加 「動力船鮫漁」普及 5月 ブレダン出漁が減少 5月 「動力ブレダン」船外機搭載用木枠が固定式に 5月 3頭捕獲以後捕獲なく漁期の不漁	3月30日 レウォレバト町中央市場全焼 ラマレラ村までの往復定期トラックバス4台に増加	10月21日 ユドヨノ新政権発足 *地方行政法、中央・地方財政均衡法が改正 12月26日 スマトラ島沖大地震津波
2005	5頭	5月 ブレダンの出漁激減 7月12日 ラマレラ史上初動力船4隻でザトウクジラ捕獲 8月11日 15ヶ月ぶりにクジラ捕獲	1月 石油燃料不足による高騰 県都地域で携帯電話が利用可能になる 3月 レンバタ島干ばつが凶作になる 6月3日 国営電力会社PLNによる電力供給 ラマレラ村に初めて電気が入る	6月から地方首長直接選挙が開始 10月21日 石油燃料126.6%大幅値上げ
2006	4頭	「動力ブレダン」は4隻に増加 漁期にクジラ捕獲なし 1989年以降の深刻な凶漁	6月2日 直接首長選挙でアンドレアス氏 レンバタ県知事再選(2011年まで) 8月26日 県政府が金・銅鉱床の探鉱を許可 12月 ラマレラ村で携帯電話が利用可能に	5月27日 ジャワ島中部地震死者約6,000人
2007	43頭	1月28日 初の日曜日捕鯨 5月2日 ラマレラ史上最大18mの白い巨鯨捕獲 36年ぶりの豊漁 「動力船参加式ブレダン捕鯨」普及	アメリカの環境団体Photovoicesが村民にデジタルカメラ50台を6ヶ月間貸与 写真展後ラマレラ村の記録保存のプログラム開始 (WWF、フォード基金、ナショナルジオグラフィック共催) 4月30日 WWFインドネシアがソロール諸島海域環境保護船「コテクラマ」号の進水式 7月 ラマレラに水産高校開校 11月20日 Photovoicesがラマレラで村にて写真展開催	3月6日 西スマトラ地震死者73人以上 NTT州知事選挙フランス州知事2007～2012
2008	34頭	動力船26隻に増加、動力ブレダン8隻に増加 捕鯨は「パレオ捕鯨」へ移行	ラマレラ村までの往復定期トラックバス6台に増加	1月27日 鳥インフルエンザ感染死者100人に 5月24日 石油燃料平均28.7%値上げ
2009	5頭	3月 地方政府網漁船2隻を村に援助 4月 夜間操業「動力船流し網漁」導入 8月 「動力船流し網漁」本格化 ブレダンは「パレオ捕鯨」で稼働	5月14日 マナド国際海洋会議にて「サウ海海洋保護」制定、レンバタ島海域は除外される 7月 ラマレラ沿岸で他地域船による爆弾漁が活発化 10月29・30日 第1回「FestivalBaleo」を村で開催	5月11日 マナドで国際海洋会議開催 7月8日 直接大統領選挙 10月20日 第二次ユドヨノ政権発足
2010	22頭	5月 夜間操業「動力船流し網漁」本格化 8月 一週間でマッコウクジラ13頭の多頭数捕獲	11月29日 ラマレラ村男女106名が伝統捕鯨保護を県議会に訴える直接行動	10月25日 スマトラ島沖地震死者500名 10月26日 ジャワ島ムラビ山噴火死者200名以上
2011	14頭	5月 操業ブレダン7隻のみ(4隻は5月で中止)	5月19日 レンバタ県知事選挙 6月 EliaserYentjiSunur新知事就任(2016年まで) 9月8日 ラマレラカトリック宣教125周年記念式典	12月4日 テルナテ島ガマラマ山噴火
2012	3頭	2月29日 捕鯨時に事故、シカテナ船のG.クラケSLOが3月3日に捕鯨事故死 5月 夜間流し網漁は8月解禁に決定 5月 操業ブレダン2隻のみレファ捕鯨の終焉 深刻な凶漁と豊漁との差が顕著になる	レウォレバトラマレラ道路の大規模拡張工事 12月 ウラウンドニ市場に販売市場施設開設	6月29日 バリ島の棚田が世界遺産に登録
2013	18頭	2月5日 捕鯨時にドルテナ船のY.スガジSLOが事故で右足首切断 5月6日 3年ぶりの漁期開けにクジラの捕獲 7月13日 捕鯨時BT船のY.クプロTFO事故 右肋骨骨折 8月15日 動力船ペロ消失事故—シャチ捕獲時に転覆し消失、漁師12人は泳いで上陸し無事生還	5月 ラマレラ村に通信基地局タワー完成 インターネット環境整備され7月通信開始 6月23日 観光・創設経済大臣がラマレラを訪問 10月27日 ラマレラ村に24時間電力供給準備完了	5月23日 NTT州知事選挙 7月17日 フランス州知事2期目～2018 6月22日 石油燃料ガソリン44%値上げ 8月 国家行事セイル・コモド開催 10月4日 バリ島でAPEC開催
2014	31頭	6月～8月に4回の多頭数捕獲で18頭のクジラを捕獲 動力船鮫漁と動力船網漁の漁期を変えることで、ほぼ通年操業が可能になる	5月14日 日本の旅行会社主催による初の団体観光客 8月17日 ウラウンドニで村の境界問題で紛争 以後歴史のある伝統市ウラウンドニ市場は閉鎖	1月～スマトラ島シナブアン山噴火と溶岩流 10月20日 ジョコ・ウィド政権発足 12月28日 エアアジア機墜落死者行方不明162名
2015	7頭	動力船3隻が新造されて30隻に増加 5月～9月の漁期にクジラ捕獲2頭のみで凶漁に	5月 新礼拝堂が完成して初の海明けミサラマレラ村の山側に新道路が開通 観光省・地方政府がツーリズムを推進し、団体客の増加 ウラウンドニ市場の代替えとしてラマレラ村の郊外に市場を開設して交換市を継続開催	7月9日 ジャワ島ラウン山噴火でバリなど空港閉鎖 11月4日 ロンボク島リンジャンニ山噴火 12月9日 インドネシア初の地方統一首長選挙
2016	12頭	2月と4月にそれぞれ単独オスの巨鯨捕獲 5月にブレダン操業なし 8月17日 独立記念日に5頭の高頭数捕鯨	4月26日 ブレダン船ケナプカ進水式(破損により解体し、1991年以来25年ぶりの新造)	1月14日 インドネシアの首都ジャカルタの中心部で爆弾テロ事件 11月4日 アホック、ジャカルタ特別州知事がイスラムの聖典「コーラン」を引用し、イスラム教を冒とくした問題になり首都で大規模デモ
2017	20頭(9月末)	5月村の協議で5～6月はブレダン操業活発化を推進 漁期にクジラ群の回避、5月に3回で9頭、6月1日に5頭、7月20日に5頭の高頭数捕鯨	1月17日 ラマレラにNTT銀行・預金融資部が開業 2月15日 レンバタ県知事選挙 5月22日 EliaserYentjiSunur再選され県知事就任(2021年まで) 6月15日 州観光庁が2018年からホエールウォッチング観光推進を目指すと発表 8月2日 A村でラマレラ史上初の井戸の掘削成功で生活水供給可能に B村でも掘削開始	2月15日 101自治体統一地方選挙 4月19日 ジャカルタ州知事選挙の決選投票アス氏 5月9日 インドネシアの地方裁判所は、イスラム教の聖典「コーラン」を侮辱する発言をしたとして、バスキ・ジャカルタ州知事に禁錮2年の実刑判決 9月22日バリ島の最高峰アグン山が火山活動活発化で住民避難開始

ンが初漁に出ている。8月には2000年からのプロジェクトである道路建設が完成した。念願であった県都レウォレバ町から毎日一往復する定期トラックバス路線が、25日にラマレラA村まで開通して町への日帰りが可能になった(写真23)。これにより、翌2003年には長年親しんできた定期船航路は廃止された。

2003年8月20日に新しい郡、ウランドニ(Wulandoni)郡が発足し、ラマレラA村・B村ともにこれまでのナガウトウン(Nagawutung)郡から編入した。郡都は定期市の開催されるウランドニ(Wulan Doni)に置かれた。

2004年に4台に増加した定期トラックバスの普及は伝統的な女性の行商にも大きく影響した。定期的に出かける山間の行商もトラックバスを利用して行くようになった。何時間もかけて歩いて行った村はわずか30分ほどで到着する。トモロコシやバナナが入った荷物を頭上に載せて山道を歩く姿はこの年以降しだいに消えてゆく(写真17, 18)。便利になった反面、現金を必要とする行商へと変化した。同年は動力船釣漁が普及した年でもあり、軌を一にして動力化により男女のライフスタイルが一変した年として記録される。

2005年6月3日には、夜間18時から翌朝6時までの12時間のみではあるが国営電力会社PLNによる電力の供給が開始され、昔ながらの鯨油ランプの夜は消えた。

2006年12月には携帯電話の利用が可能となり、道路・交通・電力・通信のインフラがほぼ整い、貨幣が必要とされる経済システムへと移行していくことになる。

2007年は環境保護団体の活動が村で活発におこなわれた。アメリカの環境団体である「Photovoices」が村民にデジタルカメラ50台を6ヶ月間貸して、村で写真展とセミナーを開催した。同時にWWF(World Wildlife Fund) Indonesiaがソロール諸島海域の環境保護活動のための船「コテクラマ=マッコウクジラ」号を活動させた。これ以降、反捕鯨団体を含めた国際的な環境保護団体による活動は2010年まで断続的ではあるが継続してゆく。村では従来からある幼稚園、小学校2校、中学校について、新たに公立水産高校SMKNが開校して義務教育以上の中等教育が村内で受けられるようになった。

2008年にはトラックバス6台に増加した。B村村長もバスを所有して運送経営に参加している。環境団体「Photovoices」がジャカルタで写真展とセミナーを開催している。

2009年はインドネシア政府・NGOの環境保護活動

も活発化し、マナドの「国際海洋会議」(World Ocean Conference)において「サウ海海洋保護区」(Kawasan Konservasi Perairan Laut Sawu)が政府によって制定された。しかしながら、ラマレラ捕鯨を否定しかねないレンバタ島を含むZone IIは、国際海洋会議前のラマレラ村民と関係者の強い反対と調整により、サウ海海洋保護区の対象から除外された。また、漁期終了後に村の宣伝活動として第一回「フェスティバル・バレオ」が政府主導で開催され、以後インドネシア人の報道関係者やカメラマンなどが毎年訪問するようになる、

2010年にはラマレラ村の男女106名がプレダンと動力船に分乗して県都レウォレバに向かい、海岸にキャンプして伝統捕鯨保護を県議会に訴えるデモを行った。この年以降、ラマレラ捕鯨規制・クジラ保護活動はラマレラ捕鯨を観光資源とする流れにシフトしていく。水産高校の第一期生が全員国家試験に合格して卒業する。

2011年に県知事選挙が行われ新知事が誕生した。地方政府・州政府指導のラマレラ観光化とそのためのインフラ整備が始まる

2012年に県都レウォレバ-ラマレラ幹線道路の拡張舗装工事が開始される。ウランドニ市場には、物々交換市に隣接して、日用品を販売する商人のために販売市場が開設された。

インドネシアの省庁の改編で文化・観光省が観光・創造経済省になる。中央・地方政府が観光業振興、地方活性化を図り、レンバタ県ではラマレラが観光振興政策の中心と位置づけられ、以後インフラ整備が加速する。

2013年には通信基地局タワーが完成してインターネット環境が整備され、電力会社は24時間電力供給用の工事を完了させた(写真19)。また、観光・創造経済大臣が村を視察訪問している。

2014年には団体観光客の増加がみられるようになった。日本の旅行会社主催による初の団体観光客が訪れ、プレダンに乗船しての体験型観光を敢行した。8月には伝統の物々交換市であるウランドニ市場が村同士の紛争により閉鎖に追い込まれるという、歴史的な事件が発生した。将来的にラマレラ捕鯨文化の画期的な変容がある

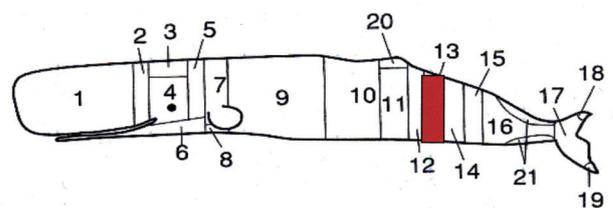


図3 分配部位

ことが想定される。

2015年にラマレラ村の山側を通る新たな道路が開通した。将来的には島南岸縦貫道路の建設が予定されている。ウランドニ市場の閉鎖に伴い、ラマレラ村の郊外に物々交換市場が開設されたが、暫定的な市場として数年間継続してウランドニ市場再開となるのか、あるいは新たな市場の歴史となるかは、今後の政府ならびに地域住民との協議が重要になる。

2016年は11月に海事資源調整省による「クジラセミナー」がレンバタ島の県都で開催され、政府の観光振興の対象にクジラ資源が注目されていることが明確になる。

2017年は1月17日村内にNTT銀行の預金融資部門が開業した。

6月15日にはNTT州観光庁が州都でワークショップを開催し、2018年から自然保護団体The Nature Conservancyと協力して州観光振興一環としてホエールウォッチング観光を開発すると発表した。

8月にはA村においてラマレラ歴史上初となる井戸掘削が成功し、恒常的な生活水の供給が可能となる予定が立った。引き続きB村での井戸掘削が開始され、長年の給水苦から解放される新たな歴史の始まりである。同時に、観光客受け入れのネックとされていた水問題の解決は観光市場を拡大させることにもなる。

## 7-2. 捕鯨と漁の変遷

漁法に変化の兆しが見られたのは、やはり2000年頃からである。1999年末から2000年初めの休漁期に、船外機搭載の動力船3隻が突取式による《動力船鉆漁》でゴンドウクジラ47頭を捕獲する豊漁となった。これが契機となり、1996年以来6隻だった動力船が1999年以降には次々と新造され、2017年では30隻を数えている。以下捕鯨と漁の変遷を年ごとに見てきたい。

### 2001年 - 動力船参加式プレダン捕鯨の導入

動力船の増加が捕鯨法にも画期的な変化を見せた。動力船の捕鯨への参加である。2001年4月29日のラマレラ慣習協議「トブ・ナマ・ファタ」(tobu nama fata)で“クジラを捕獲したプレダンを動力船が曳航して帰航した場合には、捕獲した部位のうち、「キレ」(kile)と呼ばれる胴部の一部(図3)を動力船の船主、乗組員に分配されること”が決定し、プレダン捕鯨への参加が正式に承認された(写真20)。これは、マッコウクジラを確認すると動力船はプレダンを曳航してクジラを追い、捕獲後もプレダンを曳航して帰るという方法で、私たちは《動力船参加式プレダン捕鯨》と呼称する(写真21)。動力船ではマッコウクジラ捕鯨はできない。転覆

時の船外機破損・紛失の危険性などが捕鯨に使用できない理由であるが、重大なことはラマレラ村の捕鯨慣習法に違反することである。

21世紀に入った2001年は動力化へ移行した年、また捕鯨に動力船参加が正式に承認されたラマレラ捕鯨史における画期年、「動力船元年」である。動力船が捕鯨に参加することで捕獲確率が高くなったためか、1月から6月まで9回の捕獲機会に16頭のクジラが捕獲された。1回の捕獲機会に複数のクジラを捕獲する可能性が増したこともあり、この年は35頭の豊漁になった。

### 2002年 - 動力プレダンの導入

翌2002年5月8日ラマレラ捕鯨史上画期的な出来事があった。プレダンの船尾に着脱式木柁を装着して船外機の搭載を可能としたプレダンの考案、すなわち《動力プレダン》の出現である(写真22)。プレダンJava Tenã号は船尾の木柁に15馬力の船外機を搭載して出漁し、浮上したクジラにいち早く追いつき、船外機を外して動力船に移したのちマッコウクジラを捕獲した。クジラ捕獲は28頭で豊漁になったが、これ以降、プレダンと動力船の2隻を所有するグループが2隻でペアを組んで捕鯨することにより、捕獲頭数に明らかな差が生じた。

### 2003年 - 動力プレダンの優位

2003年になって、Java Tenã号、Muko Tenã号そして新たに動力化したManula Beloloの3隻で全18頭のうち半数以上の10頭を捕獲し、独占状態に近いことが見て取れる。手漕ぎプレダンでの捕獲機会が極端に限定され、動力船の造船が加速されていく。また、漁期に捕獲頭数4頭と漁期にクジラが獲れない傾向が現れる。

### 2004年 - 動力船鉆漁の普及

2004年にはラマレラ捕鯨船史上初となる船外機搭載用の固定式木柁「スピ」(sepi)を備えたプレダンDemo Sapãが稼働している。動力船は7隻が新造され、船体総数はプレダンの20隻を上回る21隻に増加した。プレダンの捕鯨グループでは、プレダンと専属の動力船の2隻を所有するスタイルが普及してくる。

動力船鉆漁が普及してプレダンの出漁が激減した年で、プレダンは5月の数週で毎日の出漁を取りやめている。漁期にクジラが回遊してこない傾向が続き5月に3頭獲れただけで漁期は終了し、年間クジラ捕獲は14頭で不漁になった。この年はプレダン鉆漁から動力船鉆漁へ転換した年として、2001年について重要な年として記録される。

### 2005・2006年 - 歴史的な不漁

2005年はマッコウクジラの年間捕獲頭数わずか5頭という凶漁に見舞われた。そのほかに動力船鉆漁でシャ

子を3頭捕獲し、7月12日には動力船4隻で史上初となるザトウクジラを捕獲した。動力船は1隻が新造された。

2006年は1989年以来の深刻な凶漁年となった。1月から3月までの休漁期に4頭捕獲されただけ終わってしまう。4年間連続して漁期にクジラが回遊してこない異常な事態であり、捕鯨法の転換からの確立へ向かう移行期に起きた不漁時期である。動力船は2隻が新造された。

#### 2007年 - 動力船参加式ブレダン捕鯨の普及と歴史的豊漁

2007年は前年まで2年続きの不漁による苦難から、カトリック教会神父に許可を得て、初めて日曜日操業を敢行して捕獲が実現した。漁明けの5月2日には、体長18メートルで頭部の白い白鯨、ラマレラ捕鯨史上最大の雄鯨を捕獲し、これ以降年間捕獲数は43頭という36年ぶりの歴史的な豊漁年となった(写真24, 25)。動力船は2隻が解体されて消滅した。

#### 2008年 - バレオ捕鯨に移行

2008年は一度に複数のクジラがとれて34頭の豊漁になった。新たな傾向として、毎日の漁は動力船鉆漁に従事してブレダンは稼働させず、クジラを目視したときに出漁して捕鯨する《バレオ捕鯨》に移行してきた。稼働しているブレダンは約半数の8隻が船外機搭載可能な船体となった。動力船は3隻が新造された。

#### 2009年 - 動力船流し網漁の導入

漁期に入る直前の4月に動力船 Roni 号と Kopo Lere 号によって大型の網が本格的に導入されて漁獲効率の大幅な向上が見られた。夜間網漁の技術革新が顕著になり、混獲による新たな漁獲資源も加わり、捕鯨・鉆漁と網漁の併存する新たな時代を迎えた。夜間操業の《動力船流し網漁》を主体として、昼は浜で網具の手入れや補修をしながら、クジラ目視してから出漁する《バレオ捕鯨》へと大きく変容する可能性が考えられる。ベテランのラマファ4人が引退して世代交代がすすんだ。動力船は2隻が新造され、船体は27隻を数える。マッコウクジラは5頭捕獲したのみで凶漁であった。

#### 2010年 - バレオ捕鯨による多頭数捕獲

8回の捕獲機会に22頭のマッコウクジラを捕獲しているが、そのうち8月の僅か1週間で13頭という極端な偏りは、マッコウクジラ捕鯨の不確実さと難しさを象徴している。すでに動力船参加式のバレオ捕鯨が主流になり、少ない捕獲機会に多頭数捕獲という傾向が表れている。動力船網漁が本格化して、その動向しだいでは捕鯨文化の変化が加速されることが予測された。また、携帯電話の普及により、捕鯨の電話連絡を受けた山民が

直接村にクジラ肉を買い付けに来るようになった。

#### 2011年 - ブレダンの鉆漁は衰退

5月に4隻が数日間操業したのみでブレダン鉆漁をおえてしまい、明らかな衰退がみられるようになった。いっぽうで5月から動力船網漁が普及し、5月から操業を開始して漁獲量が大幅に増加した。クジラ捕獲は14頭で不漁になった。

#### 2012年 - 2月捕鯨で死亡事故

慣習協議で5月から7月までは鉆漁のみ、8月から動力船網漁が解禁して10月までで漁期が終了することが新たに決定した。2009年から昨年までの3年間は動力船網漁による漁獲高が増えすぎ、伝統漁である鉆漁が衰退してしまうことを危惧しての自主規制である。2月に1頭のクジラが捕獲されたが、捕鯨時にクジラの尾ヒレでの打撃による負傷が原因で若い鉆手が命を落としている。同様の事故による死者は1972年以来40年ぶりであり、記録の残る20世紀以降の捕鯨史で4人目という希有な事故である。死亡事故で操業が減ったことも影響してかマッコウクジラは年間3頭という極端な凶漁の年となった。動力船1隻が解体され1隻が新造された。

#### 2013年 - 捕鯨で脚切断事故・動力船消失事故

2月にクジラ4頭の捕獲があったが、漁師が足を鉆網に絡ませて負傷し、病院で足首を切断するという事故が起こった。8月にはシャチの捕獲で遭難事故が発生している。動力船1隻がシャチ9頭の群れに遭遇して1頭を捕獲した。その後1隻のみが夕方まで追尾し、捕獲機会を得て鉆を打ち込んだがシャチに曳かれて転覆した。漁師12名は海に投げ出され、動力船はシャチに曳かれたまま遠方に消え去った。僚船がいなかったため遭難した漁師は、日没時から夜間まで3-4時間かけて泳いで上陸し、全員無事に帰還した。動力船はその後の捜索にも関わらず消失した。船の遭難消失事故は1994年に起き、2隻のブレダンを失って以来の重大な事件である。前年の捕鯨時の死亡事故と本年の重傷事故について操業事故が2年連続し、捕鯨のみならず鉆漁の危険性とブレダン捕鯨技術の継承問題が再認識され、今後の大きな課題と考えられる。捕鯨事故には様々な要因があるが、若者が動力船漁を選択してブレダンでの漁に参加する機会が激減し、継承されてきた捕鯨技術や操船術の衰退が懸念される。クジラ捕獲は18頭であった。

#### 2014年 - クジラが多頭数捕獲

ブレダンによる鉆漁は衰退し、操業日34日延べ82隻の操業で漁獲数はイトマキエイ類20匹に過ぎない。いっぽうで、動力船鉆漁はブレダンのようには気象や



図4 ウランドニ

海象に左右されないため操業期間が長く、5月～9月・12月～4月まで稼働し、小型鯨類は173頭、うちコビレゴンドウは39頭を捕獲している。網漁は8月解禁で11月初めまで操業して、ほぼ通年操業が普及してきた。

クジラ捕獲は5月から9月の漁期に、10回の捕鯨機会に28頭を捕獲し、そのうちの6回は1回の捕鯨機会に3頭以上を捕獲する多頭数捕獲であった。将来的にこのような捕鯨が特徴になると予測される。クジラ捕獲は31頭と6年ぶりの豊漁となった(写真27)。

#### 2015年 - 動力船鉆漁と網漁による通年操業の確立

年間操業サイクルの変化としては、網漁が8月から11月末まで操業するようになった。従来の休漁期である12月から翌4月までも動力船鉆漁で操業している。動力船鉆漁では1月から3月の雨季にかけてコビレゴンドウが54頭の豊漁になり、4月末にはシャチが1日に4頭捕獲された。動力船は3隻が新造され、動力船鉆漁はさらに活況を呈しており、操業の長期化に加えて操業時間も早朝7時から16時までと長くなり、プレダン曳航の役割で捕鯨参加がすでに捕鯨法として確立されたことを含め、動力船鉆漁はラマレラ鉆漁の主流となっている。クジラ捕獲は7頭で凶漁になった。

#### 2016年 - 漁期のプレダン鉆漁操業はなし

5月のプレダンによる漁は1隻が4日間、6月も2隻が2日間操業したのみで、ほぼ操業なしの状況であった。動力船鉆漁は1月から3月にコビレゴンドウが55頭と、ここ数年は雨季のゴンドウ漁は安定した漁獲がある。昨年に続き漁期前の3月末にシャチが1日に4頭捕獲された。動力船網漁は8月から10月末で操業を終えている。クジラ捕獲は12頭で昨年に続き不漁となった。

#### 2017年 - 漁期のプレダン鉆漁が復活

動力船鉆漁は1月から4月にコビレゴンドウが27頭と少ない漁獲となった。

5月からの漁期におけるプレダン鉆漁は、村民慣習協

議において2カ月は積極的に操業することが合意されて復活した。5月と6月には7～9隻がほぼ毎日操業した。マッコウクジラは漁期に回遊があり、5月に3回で9頭、6月に1回で5頭、7月に1回で5頭、計19頭を捕獲し、うち3回の多頭数捕獲で15頭捕獲している。

## 8. ウランドニ市場閉鎖事件

### 8-1. 概要

最後に、2014年8月16日の土曜日、くしくもクジラが5頭獲れた日を最後に閉鎖されてしまったウランドニ市場について述べたい。市場閉鎖は《ラマレラ捕鯨文化》にとって歴史的な事件といえるからである。

物々交換市が開かれるウランドニは、市場という意味のウラン(Wulan)と、ドニ・ヌサレラ(Doni Nusalela)とよばれる海岸の地名とを組み合わせるウランドニと呼ばれる。海辺のこの土地がラマレラと山民との物々交換の場として初めに開かれた伝統的な場所であり、市は400年以上の歴史を持つ。ラマレラ村民がクジラ肉を山民の産物と物々交換するための最も重要な伝統市であり、山民にとっても最も重要な場所となっている。

ラマレラ村の女性たちが物々交換を行う伝統市は、ウランドニの土曜市、そしてもう一つの定期市であるレバラの水曜市である(図4)。ラマレラからウランドニまで約6キロ、そこからレバラまでは約5キロの距離にある。ウランドニはラマレラとの関係で開かれた市の場であり、いっぽうのレバラはラマレラが歴史に登場する頃からすでに島の南岸で交易地として栄えていた南岸唯一のムスリム村である。島の南部地域はほぼカトリック教徒であるが、レバラでも物々交換市が開かれていることから明らかなように両者の関係は良好である(写真26)。市場閉鎖事件を述べる前に、ウランドニ市の重要性を物語るその伝承を見てみたい。

### 8-2. ウランドニの伝承

ドニ・ヌサレラ、のちのウランドニはラマレラの移住伝承に登場する。ラマレラ移住伝承は15～16世紀に始まり、スラウェシを出発したラマレラの祖先が、セラム島を経由し、レンバタ島にはじめて上陸するのがレバラであり、次の寄港地が市発祥の地ドニ・ヌサレラである。以下のような伝承が語られている。

「ラマレラの祖先はレバラを退去させられた後、今、市が開かれている海岸、ドニ・ヌサレラに立ち寄った。ここにはほとんどひとが居住していなかったため、彼らはそこに移り住んだ。その当時、ドニ・ヌサレラから少し離れた山間にあるヌアレラ(Nualera)村が、この地

域を支配していた。その長は友好的に彼らを迎え、食糧を分け与えた。そして、ラマレラの祖先は彼らが持つ技術とヌアレラの持つ政治権力を交換しようと提案した。彼らは、その村の近くに土器に適した土を見つけ、ヌアレラのひとに土器の作り方を教えた。その代わりにヌアレラのひとは鉄の鍛え方を彼らに教えた。その当時、ラマレラの祖先は銚を所有していたが、鉄製ではなく、スオウの木で作られた木製の銚を使用していた」

伝承には土器作りと鍛冶の技術の交換の話が登場するが、土器作りに関しては、その後ヌアレラ村が独占することになり、現在もレンバタ島での唯一の生産地となっている。銚を作る鍛冶の技術もラマレラの男性だけの特殊なものである。

この地での重要な出来事は、レバラ到着まで権力を持っていたタナクロファという氏族が失脚し、コロハマ氏族が指導権を奪ったことである。タナクロファはレバラ村で災いを起こし、レバラを追い出される原因をつくった。そのためタナクロファは権力をコロハマに譲り渡した。コロハマはドニ・ヌサレラに着くまで、自分の氏族の名前を明らかにしなかった。そこで、ヌアレラの長は「対等の地位」という意味をもつコロハマという氏族の名前を彼に与えた。

さらに、当時のこの周辺はフローレス島のララントウカの王の支配下にあり、ララントウカの王はこの地域をヌアレラの長に支配させていた。この時、ヌアレラの長はこの支配の権利もコロハマに移譲した。氏族名の呼称や領土の支配権の移譲、土器や鍛冶の製作技術の授受の交換がラマレラとヌアレラとの交換の始まりであるといわれている。しかし、なぜ領土の支配権の移譲までおこなわれたかは分からない。このコロハマたちが後にラマレラの地に移り住み、今のラマレラを築いたという村の起源伝承が歴史として語られている。

### 8-3. ウランドニ市の起源伝承

この伝承当時、まだウランドニの市場は開かれていない。ラマレラに残る市場開設起源伝承はまた別に存在し、その伝承は次のようである。

「ある日、ダトという名の男が指導者になり、ダトテナ号に乗り漁に出た。たまたまマッコウクジラに銚を打ち込み、それに曳かれてレンバク島の東にあるパンター島海岸まで流されていった。彼らは、その島のドウリの浜でクジラを捌き、一か月も留まり、市場を開いた。いまでもあるダト・バジェの市場は、この時から始まった。その頃、ラマレラでは彼らが死んだものと思ひ、オウム貝を死体に見立てて、海岸に埋葬した。その後、ダトと乗組員はダトテナ号に乗り、無事ドニ・ヌサレラま

でたどり着いた。もともと、ヌアレラ村のひとは友好関係にあったので、彼らは水をもらいに村に上がったが、誰も出てこない。村びとも彼らが死んだものと思っていたからだ。彼らはクジラの皮を持っていき、自分たちが本当に生きているのだと証明した。そして、村で彼らは自分たちがいない間に、ラマレラで起こったことを聞いた。

浜にいた一週間の間、山から下りてきたレウカ村のひとたちが彼らに食べ物を与えてくれた。お礼にクジラ肉を分け、ここで市を開くことを決めた。この交換が、今のウランドニの市の起源である。ダトはまた、ラマレラにもサカナを送り、自分と仲間は生きていて、ドニ・ヌサレラで待っていると伝えた。ラマレラの長老は葬儀を取り消す儀礼をおこない、はじめてダトたちは村に帰ることができた。この儀礼をせずに、彼らがラマレラに帰っていたら、彼らは死者の魂のように見なされ、取り扱われただろう」

この伝承は、今でも、新造船の儀礼の中に現れている。漁期前の4月に新造船の船おろし儀礼がおこなわれるが、そこでは必ず、クジラ肉、魚、塩をプレダンに積み、ウランドニまで航行していく。海岸には山から農作物を持ってきた山の民が待っている。そこで、サカナと農作物を交換し、プレダンはラマレラの浜へ戻っていく。ウランドニはこの起源伝承時から現在まで伝統市場として継続して使用されつづけた場所である。

### 8-4. 市場閉鎖の経緯

ラマレラと山民にとって重要な市のひらかれる、ウランドニ市場閉鎖に至る事件のあらまは以下のようなものである。ウランドニ郡は2003年に発足し、ラマレラA・B村も含む15村からなる。行政府がウランドニ村(693人, 6.91km<sup>2</sup>)に置かれ、村には廃村になった旧ヌアレラ村の人々が移転して居住し、ウランドニ市場は従来の場所で機能している。また、隣村パンタイハラパン(Pantaiharapan)村は零細漁民の旧ルキ(Luki)村が、郡発足で改名・改変され、新たな移住者により人口が増加し、島の南岸有数のムスリム漁村(787人, 9.43km<sup>2</sup>)に発展している。

以前より両村の境界問題があり、地方政府公共工事による境界標の設置が行われる。政府の地割と伝統的所有地との齟齬から諍いが続いていたが、防波堤工事が開始されてウランドニ市場周辺まで工事が進行した時点で紛争に発展し、8月17日独立記念日にウランドニ村の男性がパンタイハラパン村民に殺害される事件が起きた。郡公共施設の襲撃事件も発生して、生命の危険を感じたウランドニ村民は近隣の村に避難を余儀なくされた。こ

の事件により、翌土曜日のウランドニ市場の開催は中止となり、事実上市場は閉鎖された。

この事件当時私たちはラマレラ村に滞在しており、江上は事件の発端になった争いに遭遇している。江上は事件が起きた前日の8月16日、つまり市開催の最後になった土曜日にバスに乗って調査と買物のため市に向いた。午前11時頃、ウランドニとパンタイハラパンの若者が市場近くで小競り合いを起し、参加していたラマレラ女性たちは恐怖を覚えて急遽バスで引き返した。翌日曜日には、紛争からウランドニ側の一人が犠牲になり死亡し、その後、郡庁舎や教会、商店への投石などがあり、ウランドニ村民はラマレラ村を含めた近隣村の親族の家やカトリック教会・学校に避難した。

境界線を巡る争いが発端ではあるが、カトリック村とイスラム村との争いの様相を呈していた。他の島よりムスリム勢力が夜襲をかけるとの風評が広まり、特にウランドニ郡書記と村長がラマレラ出身者であることから村にも緊張が走り、男たちは山刀を手に徹夜で警備にあたった(写真28)。夜が明けてクジラの頭部解体の日には警察機動隊中隊100名が派遣され、数日間村の警備をした(写真29)。

ラマレラ村民と山民は事件の恐怖心から、土曜日の市開催日になってもウランドニ市へ行く者はいなく、物々交換市場は事実上閉鎖されてしまった。

#### 8-5. 交換市のその後

2015年になってからはラマレラ村の東端に場所を移し、金曜市に変更され物々交換市が開催されている。道端の空き地を利用して、市場として整備はされていないが、物々交換というシステムは今まで通り継続している。日用品を扱う商人もトラックに商品を積載してレウォレバ町から来ているが、山民の参加者は限られていて明らかに規模は縮小されている(写真30)。

2017年現在、ラマレラの金曜市は次第に規模が拡大し、かなりの賑わいを見せている。

しかしながらその賑わいは、かつてのウランドニ交換市とは趣を異にしている。どの地方でも一般的に見かける市場のように、町からの商人が大量の生活必需品や衣料品あるいは食料品を販売する店の割合が多くを占めている。物々交換は市場の一角で行われているが、農産物を持ち寄る山の民はクジラ肉などの物々交換ではなく、金銭で販売することを望む者が増えてきている。次第にクジラ肉だけでは食料が手に入り難くなり、現金収入の道を探す必要がすべての人にとっての課題となってきている。

将来的には、ウランドニ市が再開するのか、ウランド

ニ市が消滅してその歴史を閉じ、ラマレラ市が市場として整備されて恒久的に機能するのか、あるいはウランドニとラマレラの二箇所市が立つようになるのかは不透明である。私たちとしては平和解決してウランドニ市場が再開し、歴史のある元通りの交換市が継続できるように望んでいる。ラマレラをはじめ周辺地域の村々、すなわち《ラマレラ捕鯨文化》圏に属する人たちも、各々が対立せずに認め合い多様な人々が集まる調和のとれた交換市の復活を願っている。

#### おわりに

本稿ではインドネシアが新体制に代わった1999年から19年間の出来事を述べたが、私たちが最初に訪れた1993年から1998年までの6年間は、村では目立った変化がなかったように思う。1995年によく自動車が村に入ってきたことが「大事件」だったように、それ以前と同様の道路、電気、化石燃料、水道、電話などのない時代が続いていた。不便で質素ではあるが、平和で平等な調和のとれた社会として完結していると感じた。21世紀になってからは、2002年の路線開通、2005年の電力供給、2007年の通信網といったインフラ整備がなされた。ことに2013年に村に通信基地局が開通してから通信の普及は目覚ましく、わずか数年の間にほぼすべての村人が携帯電話を所有し、SNSを利用するようになった。クジラの出現情報も漁に出た舟から直接連絡が入る時代になったのである。

漁では2009年の動力船網漁の導入、社会では2014年の伝統市場の閉鎖、2015年のラマレラ金曜市の開始、2017年の井戸掘削による水源確保といった歴史を変える出来事がこの数年で起きているように、変化の可速度は増している。

ラマレラは20世紀末まで貨幣経済が浸透せず、人々はマッコウクジラという巨大な産物を得て、物々交換経済で暮らしてきた。村内交換での扶助システムにより各人にクジラ肉が行きわたり、それを原始貨幣として利用する社会が作り上げられていた。そのため、極端な格差社会が構築されなかったと考えられる。イトマキエイやイルカなどとは違い、マッコウクジラだけが村民全員に供給することができる資源である。

21世紀に入り盛んになった動力船による漁法は燃料費として現金確保が必須である。インフラの整備とともに情報のグローバル化が進み、それに伴って政府の振興策である観光産業がこれからのラマレラの有望産業になる可能すら否定できない(写真31)。

観光産業は貨幣経済を押し進める要因であり、現金収

入が一部の人間たちに集中することで経済格差が広がる可能性も考えられるだろう。観光化がもたらす村の変化は、あるいは以前とは比較できないほど劇的なものであるかもしれない。

しかしながら村はマッコウクジラを獲ることを止めることはないだろう。2007年に獲れた一頭の巨大な白鯨が、不漁による食糧難に2年間苦しんだ村の救世主になったように、クジラ一頭獲れることで村人全員が生きていけることを誰もが知っている(写真32)。ラマレラ社会が400年もの長きにわたり安定して継続してきた大きな要因は、クジラを獲り続けて分かち合ってきたからであり、その意味でマッコウクジラは資源であるだけでなく平等で公平な社会を象徴する生き物でもある。

四半世紀のラマレラ社会の変化と捕鯨の歴史を研究してきて、ラマレラ共同体にとって生存の根幹である山の民との共生関係を継続させるためにクジラを獲りつづけ、将来において変容を経ながらもラマレラ捕鯨とその文化が消滅することはないと確信している。

## 参考文献

Barnes, R. H.

1996 "Sea Hunters of Indonesia. Fishers and Weavers of Lamalera" Clarendon Press・Oxford

BPS: Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

2009 "Lembata Dalam Angka 2009" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

"Wulandoni Dalam Angka 2009" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

2014 "Lembata Dalam Angka 2014" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

"Wulandoni Dalam Angka 2014" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

Egami Tomoko & Koutaro Kojima

2013 "Traditional Whaling Culture and Social Change in Lamalera, Indonesia: An Analysis of the Catch Record of Whaling 1994-2010" Anthropological Studies of Whaling Edited by Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi and James M. Savelle. SENRI ETHNOLOGICAL STUDIES 60: 155-176

江上幹幸

2000a 「インドネシア、ラマレラ村における生存捕鯨—その食文化と流通—」『社会文化研究』12(1): 91-123 沖縄国際大学

2000b 「インドネシア、ラマレラ村の経済システム—物々交換による共生社会—」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』下: 325-341 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

2004 「ラマレラ研究ノート—銛についての考察(1)」、東南アジア考古学事務局『東南アジア考古学研究報告 第2号 島嶼地域の諸相』: 45-62 鹿児島大学法文学部人文学科 比較考古研究室内

2007 「インドネシア・ラマレラ村の捕鯨と近代化」『文化遺産の世界』24号: 14-17 国際航業株式会社文化事業部

2014 「インドネシア、ラマレラのクジラをめぐる交換経済と食文化」池口明子・佐藤廉也編著『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第3巻 身体と生存の文化生態』: 83-113 海青社  
江上幹幸・小島曠太郎

2010 「インドネシア、ラマレラ村 16年間の捕鯨記録と分析(Ⅰ) — 1994 ~ 2009 —」『社会文化研究』12(1): 1-32 沖縄国際大学 社会文化学会

2011 「インドネシア、ラマレラ村 16年間の捕鯨記録と分析(Ⅱ) — 2010年の捕獲記録と将来の展望 —」『社会文化研究』12(2): 65-94 沖縄国際大学 社会文化学会

2012 「インドネシア・ラマレラの伝統捕鯨文化と社会変化」岸上信啓編著『捕鯨の文化人類学』: 102-121 成山堂書店

2014 「インドネシア、ラマレラ捕鯨と漁の現在 — 2010年 ~ 2013年漁獲統計と分析」『総合学術研究紀要』17(2): 1-74 沖縄国際大学 総合学術学会

2016 「インドネシア、ラマレラ捕鯨と村の歴史 — 1994 ~ 2015 —」『インドネシアニューズレター』91: 55-86 日本インドネシア NGO ネットワーク (JANNI)

小島曠太郎・江上幹幸

1997 『クジラと少年の海』理論社

1999 『クジラと生きる』中公新書

小島曠太郎・えがみともこ

2001 『クジラがとれた日』ポプラ社

2002 『クジラがくれた力』ポプラ社

2004 『クジラにいどむ船』ポプラ社

**写真1**

ラマレラ B 村と船小屋の並ぶ浜



**写真2**

海明けのミサなどが行われる浜の礼拝所



**写真3**

木造帆船プレダンと鋳手（ラマファ）





**写真4**

週一回開催される物々交換市場



**写真5**

クジラ肉などを山村で物々交換する行商（プネタン）



**写真6**

行商（プネタン）で山道を歩く

**写真7**

物々交換における基準単位（モガ）



**写真8**

プレダン捕鯨—マッコウクジラ  
に近づくプレダン



**写真9**

プレダン捕鯨—マッコウクジラ  
に鉾を打つラマファ





**写真 10**

プレダン銛漁—イトマキエイに  
銛を打つラマファ



**写真 11**

動力船銛漁—イルカなどの小型  
鯨類を漁獲



**写真 12**

動力船銛漁—主要漁獲対象のイ  
トマキエイ類

**写真 13**

動力船網漁—2-3人で操業する  
夜間の流し網漁



**写真 14**

小舟網漁—トビウオなどを対象  
とした昼間流し網漁



**写真 15**

A村とB村を繋ぐ伝統的な階段  
「グリペ」の崩壊





**写真 16**

動力船銛漁—船外機を搭載して  
少人数で出漁



**写真 17**

頭上運搬で山道を歩く行商は姿  
を消した



**写真 18**

未明にトラックバスに乗り山村  
へ行商し帰路も車を利用する

**写真 19**

通信基地局タワーが完成して情報化社会へ



**写真 20**

慣習協議「トブ・ナマ・ファタ」で動力船の捕鯨参加が正式承認



**写真 21**

動力船でプレダンを曳航する「動力船参加式プレダン捕鯨」





写真 22

船外機を搭載した動力プレダンの初漁



写真 23

道路が開通してトラックバスが村に入る



写真 24

浜に横たわるラマレラ捕鯨史上最大の巨大な白鯨

写真 25

白鯨の下顎に並んだ 48 本の歯



写真 26

ウランドニ市場最後の開催光景で、以後現在まで閉鎖



写真 27

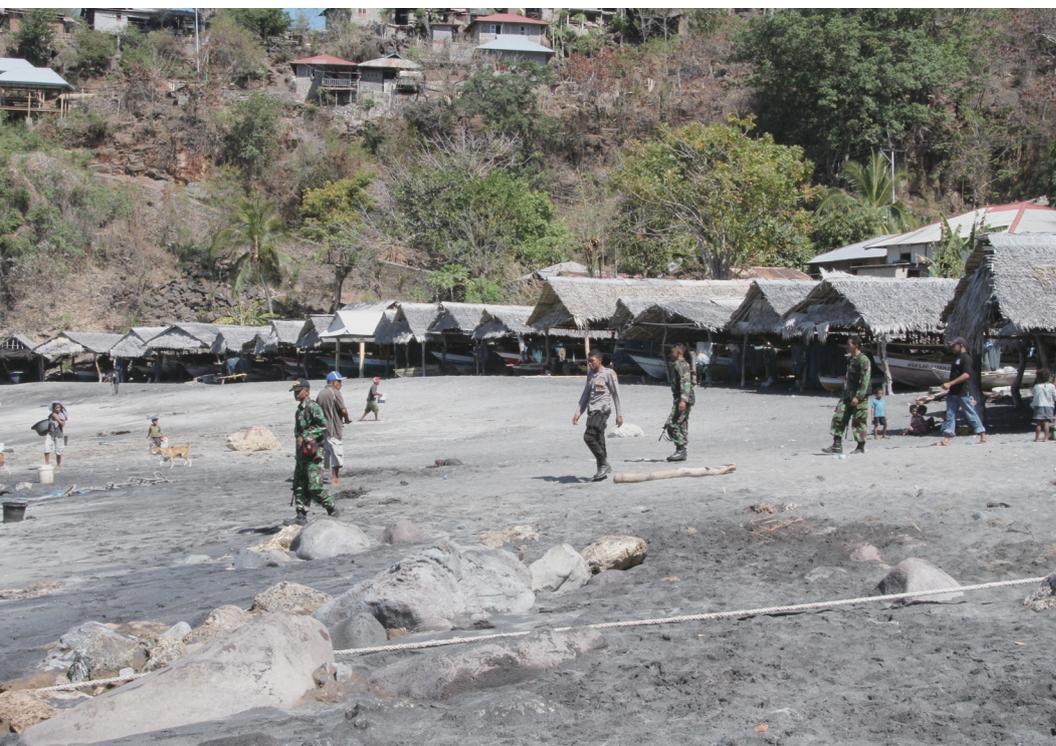
捕鯨一回での多頭数捕獲が増加して 5 頭のクジラが浜に並ぶ





**写真 28**

男性たちは山刀を手に徹夜で村の警備にあたった



**写真 29**

警察機動隊中隊 100 名が村とウランドニ村を警備する



**写真 30**

ラマレラ村入口の道端を利用して物々交換市場を開催

**写真 31**

国内外旅行者が増え、ことに国外の団体観光客が増加している



**写真 32**

マッコウクジラー頭で村人すべてが食べていける



**写真 33**

巨大なクジラが獲れた日は村が一番幸せな日である

